

書 評

『キャプティブ保険会社の実務』

浜田健一郎、河野英介、小島弘敬 著

本書は、キャプティブ保険を支援するコンサルティング会社であるフォーサイトリスクマネジメント株式会社の3人による、キャプティブ保険

社の実務全般に関する著である。この分野の業務に関しては海外ブローカーに一日の長があると思われるが、この会社は日系でありながら相

当の実績を持つ企業である。キャプティブ保険会社は設立することもあれば、代理店が設立することもある。本書は、このうち日本の事業会社が設

立する海外再保険キャプティブを対象とするものである(現在のところ、日本の事業会社が利用す

海外再保険キャプティブ検討の際の必読書

分類すると内国キャプティブと海外キャプティブに分かれ、引受保険の形態で分類すると元受キャプティブと再保険キャプティブに分かれる。また、設立者で分類すると、事業会社が設立する

評者 古澤 卓哉 (京都産業大学法学部教授)

るキャプティブ保険会社としては最も一般的な形態である。

この日本の事業会社が設立する海外再保険キャプティブに関して、本書では実務書として十分な解説がなされている。具体的には、第1章でキャプティブ保険会社に関する基礎知識を説明したうえで、第2章〜第7章で、キャプティブ保険

要な説明等を行っている。そして、第8章および第9章で、キャプティブ実務に寄与する資格とQ&Aを付加的に説明している。さらに、付録として、日本の事業会社向けの主要ドミサイルの概要、海外の事業会社が保有するキャプティブ保険会社の業種別一覧等が掲載されている。

会社の設立・運営に関する一通りのことが記述されている。したがって、海外再保険キャプティブの設立を日本の事業会社が検討する場合に、あるいは検討の前段階において、まずは手に取って熟読すべき一冊である。

正確に把握することがリスクマネジメントの第一歩であり、その結果次第でキャプティブ保険会社の設立可否を検討することになるのである。つまり、「キャプティブ保険会社の設立ありき」ではなく、自社のリスクの正確な把握がスタートラインなのである。

第3に、キャプティブ保険会社の撤退方法に関する記載がある。一般に、日本企業は新規事業を開始する際に撤退方法を検討することが少ないように思われる。けれども、新規事業立ち上げ時に撤退方法をも視野に入れておくことは、それこそリスクマネジメントの観点からは不可欠である。本書は、キャプティブ・ドミサイルの変更と

キャプティブ保険会社の閉鎖方法を述べており(第4章後半)、この点は大いに評価されよう(なお、そうした場合のコストの例示がなされていれば一層良かったと思われる)。

第4に、日本の事業会社がキャプティブ・ドミサイルの候補とするべき各法域の概要や特徴が的確にまとめられている(付録の参考資料1)。

なお、当然のことながら、各法域の法制等は適宜改正されていくので、実際の検討段階ではリスクマネジメント会社等に相談することが必須である。

このように、素晴らしい実務書であるので、海外再保険キャプティブの検討を行うおとして事業会社、およびその機関代理店等には一読を勧めたい。なお、本書に事項索引があればもっと利用しやすいものとなっていたであろう。

(A5判/296頁、保険毎日新聞社刊、23年11月20日発行、税込4180円)